講演会「昭和初期の建造物」

平成 27 年 4 月 25 日
大阪市立大学　客員教授
植松　清志氏

今日は、この歴史文化資料館が登録有形文化財に登録されたということで、本館を含む昭和初期の建造物の話をするために、古代からの「日本の建築の変遷」を見て頂きたいと思います。

最初に原始・古代から見てみます。仏教の伝来により仏教建築が移入されてから神社建築が造られるという経緯があります。元来、神社建築は拝殿だけでしたが、仏教建築の影響で本殿も造られるようになります。その本殿に発展していく一つの形態が高床家屋だろうと考えられています。登呂遺跡（静岡県）には、棟持柱を持つ高床家屋が復元されています。棟持柱を持つのは非常に古い形態で、伊勢神宮社殿（三重県）に見られます。

仏教建築を見ますと、飛鳥寺（奈良県）では、仏舎利を納める最も重要な塔を真ん中にし、左右背面に金堂が配されています。四天王寺（大阪府）では、左右の金堂がなくなり、法隆寺（奈良県）は塔と金堂が横並びになる。寺院の中で格の高かった塔の格が下り、仏像を納める金堂の格が上ったというように見ることができます。これが飛鳥時代の仏教建築の特色の一つです。奈良時代に、東大寺（奈良県）では塔が回廊の外に出され、塔が伽藍を恰好良く見せるための装置となります。寺院自体が仏像のための施設になったというのが奈良時代の特徴です。平安時代末期になりますと、末法思想により、貴族は自宅に阿弥陀堂を造るようになる。これが浄土教建築です。屋根が瓦葺きから檜皮葺きとなり、軒下の垂木が細くなります。このあたりから「和」が建築において意識されるようになります。ただ、「和様」としてまとめるのは、中世に二つの新しい建築様式が入ってきてからです。

中世になると奈良が焼き討ちにあい、復興のために新しい建築様式が採用されます。大仏様といい、有名なのは東大寺南大門です。建築を指導したのは俊乗房重源で、梁を重ねていく非常に合理的な構造になっています。もう一つの禅宗様は、円覚寺舎利殿（神奈川県）や正福寺地蔵堂（東京都）が有名です。軒の反りが非常にきつく、屋根が檜皮葺きです。禅宗様の特徴がよく表れています。中世の建築は、装飾や細工にすぐれたものが多いのですが、その背景には大工道具の発達があります。また、太い材の入手が困難になり、細い材で工夫され、美しい意匠になっていきます。

住宅について見ると、貴族の住宅である寝殿造り。ただ、寝殿造というのは今の日本の和風住宅ではありません。床は高床ですが、畳は敷詰めになっていません。大体板張りです。必要なところに畳を置く。屏風や御簾、几帳などで空間を仕切りますが、室としてはワンルームです。

中世の地方武士の住宅が、『法然上人絵伝』に描かれています。武家住宅といっても寝殿造りが簡略化されたもので、明り障子や遣戸などの建具がたくさん出てきています。絵巻物をみると、畳は必要なところだけ置いて、掛軸があって机が置いてあり、床の間があります。畳が敷詰めになる前の建物に東福寺龍吟庵方丈（京都府）があります。板張りの室の周囲に畳が敷かれています。畳

が敷詰めになり、床の間が常設化されて付書院が造られ、現在の和風住宅の原型ができあがっていきます。

桃山時代の建築は、実は江戸時代初期まで残りますが、明暦の大火以降、質素な江戸建築になります。建築としては、幕府の権威を示す非常に大きな広間が造られるようになります。江戸城大広間は下段が格天井、中段が折上格天井、そして将軍が座る上段の間は二重折上格天井となり、近世の武家住宅には格式がつけられていたことがわかります。

幕末に外国との交流が始まると、日本の大工は外国人の言う通りに建物を造ってしまいます。グラバー邸（長崎県）では、瓦は和風で洋風の煙突がついている。開智学校（長野県）は、初期洋風建築といいますが、洋風建築とは違うということで擬洋風ともいいます。大阪で有名なのは、泉布観です。また、世界遺産になった富岡製糸工場（群馬県）は、フランス人バスチャンの設計。そして本格的な洋風建築を教えたのが明治 10 年（1877）に来日したイギリス人建築家ジョサイア＝コンドルです。代表作品としては鹿鳴館があります。そのコンドルの教え子が辰野金吾です。辰野が設計した日銀大阪は、外壁だけ残して使われています。明治には色々なものが入ってきますが、大正 10 年（1921）くらいになると鉄筋コンクリート造の明治神宮宝物殿（東京都）が造られる。鉄筋コンクリート造ですが和風が意識されていて技術的にも進んでいます。

明治生命館（東京都）は、歌舞伎座を設計した岡田信一郎の設計です。すごくきっちりした様式の建築です。明治期に洋風建築を勉強した建築家が、昭和初期にこういう建築が設計できるようになっています。一方で、和風にこだわる建築家も出てくる。例としては、池田谷久吉が観心寺思賜講堂（大阪府）を造っている。和風建築のすごくいい設計がされています。この昭和の始めには、鉄筋コンクリート造に屋根をかけた建物が多く出てきます。九段会館（旧軍人会館、東京都）では、壁は洋風、屋根はむしろ寺院風。三津寺（大阪府）も鉄筋コンクリート造です。もう一つ、渡辺仁設計の国立博物館（東京都）ですが、これも鉄筋コンクリートの壁面に勾配の瓦屋根で迫力があります。

こういう時代に、この歴史文化資料館があります。本館が造られた背景である桜井駅の史跡、この史跡と一緒に造られたのは大きな意味があると思います。外観を見ると、屋根は入母屋屋根です。正面に突き出した玄関は新しい形式で、長押と格天井はお客様を迎えるという意味で造られたのでしょう。中に入ってみると、中央部が折上げ格天井、周囲の回廊部分は棹縁天井ですから、中央部と回廊部分では室の格が違うのがよくわかります。

さて、登録有形文化財とはいったい何なんだろうか。文化財には、重要文化財と特に大事な国宝があります。これらは指定で、規制も厳しい。登録有形文化財は、1996 年に文化財保護法が改正されてできた制度ですが、文化財の登録原簿に登録された有形文化財のことです。

大阪府は、この制度ができてから、非常に熱心に登録申請を出しました。なぜかというと、国土開発や都市計画の進展や生活様式の変化などにより、破壊の危機に晒されている近代建築を後世に残していくためです。文化財は、指定されたから大事なのではなく、地域で大切にされているから文化財です。特にこの資料館は、史跡公園の中の一角にあり、文化としての歴史、建物としての歴史が一体になっているという点で非常に価値が高いです。気軽に来て、見て頂き、利用してもらえたらと考えています。これで今日の話を終わります。ありがとうございました。